

原典より念佛の意義 を考察して觀念と稱 念に及ぶ

泉 芳 璟

一

支那譯の經典なきの上に單に『念佛』と云ふも、これを原語に對照するに決して一樣でない。阿彌陀經には二箇處相隣接して『念佛念法念僧』とあるが、言葉は二箇處とも全く異ふ。那先比丘經(藏八三紙六十)に『念佛』とあるのを原典に當て、見るにこれ亦異つた言ひ方である。其他『念佛』と云ふ言葉は使つてないが、念佛と同じ意義に取扱はれてゐる『乃至一念』だの『乃至十念』だの『執持名號』だの『專稱名字』だの、皆それと異つた言葉、若くは異つた言ひ方であつて、これを單に一樣に『念佛』と云ふやうな言葉で置き替えてそれで果して原典の意義が十分に顯はされ得るであらうか、甚だ疑

はしいのである。

『念佛』なる語が教義の上から極めて重大な意味を有するだけに、これは原語をよく調査し、同義異語が使はれた場合はそのやうに慎重に考察して解釋せねば不測の過誤に陥るこゝなしとは云はれまい。今少しくこれに就て考へて見よう。

二

さて『念佛』なる語は原典の上で諸處に同義異語の語形が見えるが、其の最も普通にして而も根本的のものは *Buddhismusmiti* であらう。今 *Buddha* に就ては論ずるこゝを措いて、*ansmiti* に就て考へて見よう。この語は今更言ふまでもなく接頭 *an-* (隨つて、……に沿うて、……の方へ)を語根 *sm-* に冠して作られたる女性名詞であるが、要する所はこの語根の *sm-* が如何なる意義を有するか、而して如何に使用されて來て居るかを調査するのが第一になすべき仕事である。

語根 *sm-* は *√sm-* ハーツバートハの上にも *√sm-* あり又 *√sm-* がある。前者は思想、後者は考察の義とでも見るべきか。然しながらこの語根が種々の文書

の上に種々の語形に於て顯はれて居る有様に徴して考へて見るに、凡そ六種程になるやうである。

第一は把住性を表はすもの、即ち記憶するもの、注意すること、保持すること等の意義であつて、その用例を挙げれば、

リグ吠陀(一〇一—一〇六)(揚音符號は)に

Karṇeva śisur anu hi smarāho……

『兩つの耳が使命を注意するごとくに……』

ウツタラーマチャリタ(一一—二六)に

Smarasi smasat-nrññ tatra Godāvari vā? Smarasi ca tad-

upādeṣv āvayor vartanāni?

『御身はまたかの水清きゴダーヴリーを記憶せり

や又その岸の上に我等のそゞろ歩きを記憶せりや』

次にこの意義を略ほ相似しては居るが、第二に想起性を表するものを挙げねばならぬ。第一の場合は常恒不斷的の性質ありとすれば、この場合は斷續的であること云へよう。『忘れずはこそ思ひ出さず候へ』を前者とすれば、後者は『忍ぶに猶あまりある昔』の風情であらうか。回顧、回想などの意義を有して居るものである。

原典より念佛の意義を考察して觀念と稱念に及ぶ

その用例、

シヤクタラー(六一八、九の中間)

Sakhe sarvaṃ idāññ smarāmi Sakuntalīyāñ vitanṭam

『友よ、俺は今シヤクンタラーに就ての事がらの總てを想ひ起した』

第三に又第二に極めて類似したものはあるが、渴望性を表するものがある。即ち欲求、愛戀を含むものである。即ち把住性が愛に導くこと云ふ順序である。

アトハルヴ吠陀(六一—三〇の三)に

Yathā mama smarād asau,

『彼が吾を愛する如くに』

メーグハドウータ(二二—二五)

Kaccid bhartṛñ smarasi rasike tvam hi tasya priyete.

『美はしき性なるものよ、御身は汝の夫を思つてゐてくれるか、蓋し御身はその愛人であつたのだから』

第四に考察性を挙げねばならぬ。例へば、

パンチャタントラ(一)

Smarānmo ʔahisā-devatān

『欲する神を汝自から考へよ』

第五に記述性、これは『傳説にかくあり』『かく宣言せられたり』の意義を有するもの、例へば、

ヒトーバデーシヤ(第一卷の第二話)

Hi māgo Yam dharmasyaśa-vidhah smritah

『以上は、これ正義の八種の道であるを教へられてある』

第六に念誦性、即ち心の中に反覆して誦するの意義例へば、

Yah smaret pundarikakṣam sabhīyādhyantarah Śuciḥ

『白蓮の眼をもてるもの(ヴィシヌヌ神)を念誦するものは、内外共に清淨である。』(此の一例はアプテの下に引くも)
(梵語辭典語根 *Smri* の)

以上の諸例に就き意義の移り行きの状態を考ふるに第一の把住性、第二の想起性は最も根本的のものである。ここは勿論である。第三の渴望性、第四の考察性はこの根本より流出したる第二義である。而してこれらは總て心的状態に關係する意義であつて内的のもので

あるが、これが第五の記述性になるを稍外的のものとなり、第六の念誦性に於ては、内の心意作用が幾分の唱出作用に關係するに至る傾向を生じて來た即ち觀念は稱念の傾向を帯びて居る。勿論心意作用の充實に伴隨して幾分の唱出作用を見ることは動作の自然である。

三

この一般文學の用例は移して以て佛教文學の上に當て嵌めて差支ない。然し今『念佛』なる語に就ては第一の把住性、第六の念誦性を問題として取扱へば可い。其の他は全く必要でない。

今佛教文學の上に顯はれた二三の用例に就て『念佛』の意義を檢覈するに凡そ三種の形式が認められる。第一は主として心意作用、即ち觀念に重きを置くものである。第二は心意作用であると共に、外的動作即ち稱念をも兼ねて居るを認められるものである。第三は主として稱念の外的動作に重きを置くものである。蓋しこれ語根 *Smri* が念誦性を有するより起る當然の結果であると思はれる。

第一の場合、即ち主として心意作用即ち觀念に重きを置くものは、その用例極めて多く、『念佛』の原始的意義は必ずやこれであつたに相違ない。抑も『念』なる語に就ては、マハーヴェユットパツテイ（一〇四—九、二〇二—二、等）にこれを擧げ、『念佛』なる語は、同五一—一に *Buddhanusriti* を擧げてある。已に阿含聖典には三念、六念、十念等の名あり、その第一は即ちこの『念佛』*Buddhanussati* である。勿論これらは口稱唱念の意義を含まないことは明かである。所で佛教文學ではないまでも、宗教的意義でこの『念』を高潮せるものにブハガヅツドギーターがある。その第八章第七歌に

Tasmāt sarveṣu kāleṣu mān anusmāra yudhya ca

『されば、一切の時に於て、われを念じ、而して戦へ
よめるものは觀念の義である。

次にミリンダバンハの中に『念佛』に就ての問答がある（現行トレンクナーの出版本で八〇頁の下である）

*Rāja āha: Bhante Nāgaseṇa, tumhe evaṃ dhammā: yo vā
seasantāṃ akusalam kāreyya maraṇakāle ca ekam Buddhagā
tāṃ satīṃ paṭilābheyya so deveṣu upajjeyyati; etaṃ no sadi-*

原典より念佛の意義を考察して觀念と稱念に及ぶ

rahanti

『王の曰く、大徳ナーガセーナよ、御身たちはかくの如く語る、人ありて百歳の間、不善をなし、而も死時に於て佛に往きたる念を得んに天界に生ずべし
これこれ信ぜず』

故らに今は直譯を施したのであるが、これを那先比丘經下（藏八六十三紙右）に對照すれば、

『王復問那先、鄉曹沙門言、人在世間、作惡百歲、臨欲死時、念佛死後者、皆得生天上、我不信是語』
である。此に只『念佛』のみあるも、この原語 *Buddha-gatāṃ satīṃ labheyya* は口業唱念にあらざることを明
である。

其の他華嚴經入法界品、吉祥雲比丘の下、『念佛三昧』の語あり、大乘經典の中この意味の『念佛』を拾ひ集めることは極めて容易である。

阿彌陀經依報段の下、諸鳥合奏の妙音を聞いて淨土の衆生『念佛念法念僧』する所ある所、原文は
*Buddha-maṇasikāra utpadyate dharmā-maṇasikāra utpadya
te, saṃgha-maṇasikāra utpadyate.*

であつて明かにこれ意作である。Manasikāra なる以上は議論の餘地は無い。然るにその次に諸寶行樹が微風に吹かるゝ妙音を聞きて、皆自然に『念佛念法念僧之心』を生ずるこある下を原文に對照するに、

Buddhānusmṛtiḥ kāye saṃpīṣṭhātī, Dharmānusmṛtiḥ kāye saṃpīṣṭhātī, saṃghānusmṛtiḥ kāye Saṃpīṣṭhātī.

であつて、『佛の念は身に於てあり』云々となつて居る一應これを見れば、この Anusmṛti は唱念の意義なるが如くである。然しながら『身に於て立つ(在る)』云ふ言ひ方は一種の慣用的語法であつてやはり心意作用が生ずることである。翻譯界の巨匠羅什は特に意を配つて『之心』の二字を加へたものと想はれる。

それから『念佛』云ふ言葉は使つてないが、念佛と同義に取扱はれてゐる無量壽經の『乃至一念』の語成就の文にありては、

Sūtrā cāntāśa eka-cittotpīḍā m ady adhyāśayena prasāda-sahagatena cittaṃ utp dayanti

『聞き了りて、淨心と俱行する深心を以て、たゞひ

一念の發起なりとも、念を起す…………』

であつて、それ明かに心意作用を云ふのである。因みに某氏は、成就の文の『至心廻向』を親鸞聖人が『至心に廻向したまへり』若くは『至心に廻向せしめたまへり』と訓讀せられたが、梵本に對映するに、原語正に然り、實に聖人の達眼驚くべきものがあること云つて居るやうである。然しこれは甚だ奇怪な話である。『至心廻向』に相當すべき語句は現存梵本の上に求めて得られない。これは全く缺如して居るのである缺如せるものを以て如何にして正しいか否かを判定し得べき。或は某氏の如き、願文から Parīṅmayas の一語を抽出し來りてこれに充當せんとする意向らしいが、この下は utpīḍayanti に見る如く現在形、現實法を用ふべき語勢にして、可能法を挿入しては水に油を入れたやうなものである。予を以て見れば、親鸞聖人の訓點に關しては別に説あり。何ぞ必ずしも曲解して梵本に附會する必要あらむ。却てこれ眞實の引き倒し云ふものである。以上は餘談ながら心付いたまゝを書きつけた。

次に流通の『乃至一念』も、

Ye 'ntāśa eka-citta-prasādan apī tasmīn's Tathāgāte 'bhi
lajpyanta asmiṃ's ca dharmā-paryā'ye

『少くとも一念の淨心にてもかの如來ごかの法門ごに於て得るであらうごころの…』

であるから心意作用なるご勿論である。

四

次に第二の形式、即ち心意作用であるご共に外的動作を含むもの、即ち觀念にして稱念をも兼ねるご認めらるゝものを擧げる。

法華經普門品の偈頌に幾回も繰り返されて居る「念彼觀音力」は原語に徴するに、

Smarato Avalokiteśvaram

『觀自在を念じつゝ』

であつて現在分詞の形になつて居る。

又『是故須常念』は

Smarāṃyo Avalokiteśvarah

『觀自在は念せらるべきなり』

であつて義務分詞、未來受動形である。

又『念々勿生疑』は

原典より念佛の意義を考察して觀念ご稱念に及ぶ

Smaratha smaratha makamīkṣyaṭha

『念せよ、念せよ、疑ごごらなかれ』

であつて命令法の形である。共に語根 Smi の變化であつて、把住性の意義ごも見られ、將た又念誦性の意義ごも見られる。然し若しもこれを前段の文の羅什譯、

『聞是觀世音菩薩、一心稱名、觀世音菩薩、即時觀其音聲、皆得解說』

ご對照するならば、是れ明かに稱念の義ご見るべきである。現在梵本では

Saced Avalokiteśvarasya Bodhisattvasya Mahāsattvasya

n'madheyam śrīnyus te sarve tasmā'd dūjīka-skandhāt
parinocayan.

『若し觀自在菩薩摩訶薩の名號を聞く彼等總てはごの苦聚より解脱せしめられむ』

であつて『名號を聞く』ごのみあり、『觀其音聲』の文は見當らぬ。支那で發見されたマックスミューラー所藏の一梵本にはこの間に數行の文あれご、さればごてこの『觀其音聲』に相當するらしい文は見當らぬ。然し譯場の巨壁羅什を信賴して吾人はこの一段の文を稱名ご

解し去るべくんば、後段の『念彼觀音力』も『是故須常念』も『念々勿生疑』も、稱念の意義なること語根 Smr. の意義の許す範圍に於て可能であるこそねばならぬ。

次に無量壽經第十八願文の『乃至十念』である。これは現存梵本の第十九願に相當し、

Antaṣo dasabhiḥ cittaṅka-parivāraṇi

『少くも十念發起相續を以て(念を起し)』

である。已に前文には Cittaṅgī pratyekus (念を起し) あり、又 Cittaṅka (念發起) とあるからには心意作用を豫想すること勿であるが、Dasabhiḥ (十の) と云へる語あるため、解釋は心意作用とのみ見ては稍困難に陥るマツクスミューラーは英譯して、

..... even those who have only ten times repeat ed the thought (of that country).....

として居る。勿論現文としてこれより外に譯しやうも無いと思はれるが『思想を十度繰り返す』とは果して如何なることであらうか。これも念誦の意として言葉の上に稱念することゝすべきか。若し意義を徹底せしめるには如何しても其處まで推し進めてこれを唱名の

義こそねばならぬのでは無いか。

善導が斷乎としてこれを『稱我名號下至十聲』と註解し去つたのは極めて痛快であり、始めて徹底せる意義であること云はねばならぬ。然しながら言葉としては飽くまで心意作用に屬するものなることを注意せねばならぬ。

五

次に第三、主として稱念の外的動作に重きを置くもの。これに就ては文殊般若の一行三昧 (Ekavākṛāsamādhi) を擧げねばならぬ。文殊般若は般若に屬するものとして念佛に言及せる興味多き經典である。その原典サフタシヤイカー七百頌般若波羅蜜多はまだ出版せられて居ない。予の所持せる寫本のこれに必要な部分は次の如くになつて居る。

Anupālabhayaḡomāyaṇi ca tathagataṇ maṇasikuryāt ta-sya nāmadheyāṇ gṛhītaṇ.

『而して無所得相應によつて、彼は一の如を意念しその名號を唱ふべきである』

これを支那譯(月九五紙右)に對照するに、『不取相貌、

繫心一佛、專稱名字』となつて居る。即ち如來を意念するに共に名號が稱へられねばならぬ。(grh-tavyam)。語根 grh は口音を以て陳唱することである。これは明かに口業稱念である。

阿彌陀經の『執持名號』の下、現存梵本は意念の語 (manasikāryati) あるのみであるが、羅什は或は何等か grahīyati の如き語を認めて執持を譯したのか、(蓋し grh なる語根は『執へる』意義を『唱へる』意義を有する)。それゆゑ dhāryīyati にあつたものか。若し爾らば保持してゐることゝ意念のことである。『執持』の語は聊か曖昧にして孰れも決定し兼ねるのである。

觀無量壽經は下品上生の段に『合掌叉手、稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、除五十億劫生死之罪』と云ひ、下品下生の段には、『汝若不能念者應稱無量壽佛、如是至心令聲不絕、具足十念稱南無阿彌陀佛、稱佛名故、於念念中、除八十億劫生死之罪』と云ふ。梵本に對照することゝは出來ないが明かに稱念である。善導をして稱念を主張するに至らしめたる所以のものはこれらの現文に他ならぬ。彼は流通の『汝好持是語、持是語者、即是持

無量壽佛名』とあるを何等の躊躇もなく疑惑もなく、『一向專稱彌陀佛名』と註釋したのである。

六

以上佛教文學に見えた用例を背景として『念佛』の意義を考察するに、原始的の意義は如何しても『觀念』『意念』の傾向を帯んでゐることは明かである。即ち如來の像にまれ、如來の力にまれ、これらを對象として心意の上これを寫象し、これによつて、或る超自然の力を獲得するといふことが即ち『念佛』であつた。

然るに何時の頃よりか、この充實した心意作用は口業稱念の伴隨を生じて來た。これは果して何時の頃であるか確定し難いが、已に龍樹の時代に十分これが成立して居る。即ち無量壽經の願文『乃至十念』は未だ以て意念も稱念も判然せぬ狀態であるに拘らず、龍樹は十住毘婆娑論易行品に、『阿彌陀等の佛、及び諸の大菩薩、名を稱して一心に念すれば、また不退轉を得ること』是の如し』と云ひ、『この諸佛現に十方の清淨世界に在り、皆稱名し憶念すべし』と云ひ、『若し人我を念じ、名を稱して自から歸すれば、即ち必定に入り、阿

釋多羅三藐三菩提を得む、この故に常にまさに憶念すべし』云つて居る。

然しながらこの稱念は必ずや意念の充實せる結果のエマナチオンでなければならぬ。意念の熱誠を伴はざる單行無信の口稱稱念ではない。それは『一心に念する』か、『憶念すべし』か、『自から歸すれば』ミかの語が添えられてゐる所を以て見ても明かである。

一方に又經典文學の上には『念佛』の形式が一定の形を取つて來た。チルダルス等の原始經典學者の教ふる所によると、*nano athu* (歸敬はあれ)の語は尊敬、挨拶讚嘆を表するものであり、時として母音を省きて *nani athu* ヲ云ひ、或は時に *athu* を省略する。随つて *nano* に從屬する所歸敬のものは屬格の形で残り、或はそれが *athu* に對する補足語として爲格の形で残る。かく *nano Buddhānan* 若くは *nani Buddhāya* の形が成立する。即ち南無佛は『佛の歸敬をしてあらしめよ』若くは『佛にまで歸敬をしてあらしめよ』の意である。これは挨拶の一種であつた。現今南印度で友人なき途上に相逢へば合掌して『ナマスカラ』(*namas kara*) ヲ云ふが

如きその例である。これが一步を進めて内的憧憬の念が外的口業の上に發露したものが稱名である。これも現今印度でラーマ王ミシター姫の名を稱へてラムシラーマシミミ繰返す印度教徒にその殘存の習慣を見るこゝが出来る。印度に於ける稱名の習慣は由て來る所極めて古い。然し何時ごろからミ云ふ確定は遺憾ながら今のミこゝろ不可能である。

世親に至つては『觀佛本願力』ミ云ひ、『世尊我一心』ミ云ひ、五念門の行に於て稱名を云はざるに非ずミ雖も、却て信に重きを置く傾向が見られる。曇鸞これを祖述するこゝ勿論である。然るに道綽、善導の觀經を高潮するに至つて傾向は一變した。而して稱念を以て觀念に置き替へたのは善導である。偈を作つたものは蓋し彼である。彼は念稱を一を標榜し、口音陳唱を以て念佛の第一義とした。彼や固より願行具足を云はざるに非ず、又平生身を持するこゝ峻嚴なるこゝ彼の如きを以てすれば、首尾終始此の不可あるこゝなきも、やがてこれを祖述する末徒をして修道の上に躡かしむる所以のもの亦彼に胚胎するを如何せんや。

これを日本に見るに善導を祖述するもの、源信にまれ源空にまれ、この點に於てただ徹底せざる所がある其意を得ざるに於ては末徒をして會々單行無信の畸形宗教に陥らしめる。親鸞は流石にその名の示す如く天親、曇鸞に私淑する所深きだけに、信の天地を高潮して、念佛の眞意義に徹底した。經の眞精神に透入するご否ごは別ごしても、少くごも彼の主張は最も宗教の眞意義に契當するものご信ぜられる。

彼によれば『念佛』はもはや觀念では無い。『乃至十念』も、『乃至一念』も、『執持名號』も、『一念淨信、歡喜愛樂』ご云ふが如き『信』に場所を讓つた。これは彼が『觀念』にもあれ、『稱念』にもあれ、その行業即ち修道の課程を徹底的に推し進めた結果である。行を徹底的に完全ならしめるには唯一つの道が残されてある。即ち行そのものに没入するにある。我等の所修の行、一念一刹那ごして如來が我等のために施設せしに非ざるは無い。即ち本願にして、他方であり、無作の行である。此に行信の歸一、若くは信が行に置き替えられる課程を生ずる。念佛はかくの如くにして全く異つた、

原典より念佛の意義を考察して觀念ご稱念に及ぶ

而して原始の意義ご相杆格せざる意義を生ずる。華嚴經(天九^{二十}紙右)の偈に云く、

『如來無數劫、勤苦爲衆生、

云何諸世間、能報大師恩、』

Pratikarṇaṃ kathaṃ śakyam Buddhaṃ sarva-dēhīḥ,

Satvārtheṣv abhīyuktāṅkaṃ kalpa-kōṭiśālais api.

—Gaṇḍa-vyūha—

源信の大乗對俱舍鈔

について

井上右近

此文深妙。髻中明珠。則知我等成佛無疑。歸命龍樹證成我心願。(此文ごは龍樹の言葉を) (指す。こゝには畧す)

これは日本思想史のうちに重要な地位をみこめられつゝある恵心院僧都源信の『往生要集』(卷上)に出てる言葉である

この語を誦するごき源信が思想の生命を肯定する詩